

分担研究報告書

若年乳がん患者のサバイバーシップ向上を志向した妊孕性温存に関する心理支援体制の構築
O!PEACE（がん患者の妊孕性温存に関する心理教育とカップル充実セラピー）による若年乳がん
患者への介入研究の実施

研究分担者 津川浩一郎 聖マリアンナ医科大学 外科学 乳腺・内分泌外科 教授

研究要旨

若年乳がん患者のサバイバーシップ向上のために、将来の妊娠・出産に対してがん告知後の早い段階から妊孕性温存の情報提供と、患者が意思決定をするための心理支援法を開発し、臨床試験によりエビデンスを検討することを目的とした。主体となる本研究で開発されたO!PEACE（がん患者の妊孕性温存に関する心理教育とカップル充実セラピー）を訓練した臨床心理士が、39歳以下の既婚者で同意が取得された夫婦に（2回で完結）実施した。乳がん治療中・治療後のQOL改善に貢献できる可能性が期待される。また、当施設での妊孕性温存治療に関してretrospectiveに検討している。

A. 研究目的

若年性乳がん患者のサバイバーシップ向上のために、将来の妊娠・出産に対してがん告知後の早い段階から妊孕性温存治療の情報提供と、患者が意思決定するための心理支援法を開発し、臨床試験によりエビデンスを検討することを目的とする。

B. 研究方法

本研究の研究主幹で開発されたO!PEACE（がん患者の妊孕性温存に関する心理教育とカップル充実セラピー）を訓練した臨床心理士が、39歳以下の既婚者で同意が取得された夫婦に（2回で完結）実施した。通常診療に比べてO!PEACE介入群が、①夫婦それぞれの精神的健康、②夫婦それぞれの精神的回復力の思考や行動への変容、③夫婦間のコミュニケーションの3軸に対する改善効果があるか否かを、無作為化比較試験（介入群：通常診療に加えてO!PEACEによる介入を受ける群、対照群：医療情報の冊子を渡すのみの通常診療を受ける群）を

実施して検討した。

また、当院では2010年より閉経前乳がん患者を対象に乳腺・内分泌外科（以下乳腺科）より産婦人科（がん・生殖医療外来）へのコンサルテーションを行い、適応症例に対しては妊孕性温存治療を行っている。乳腺科にて乳がんと診断された患者は、ステージやサブタイプにより手術前後の薬物療法が必要かを主治医が判断する。薬物療法が必要であり、閉経前かつ挙児希望のある患者に対しては、卵巣毒性や妊孕性低下の可能性につき説明した上で、産婦人科へのコンサルテーションを行う。この際、乳腺科主治医が産婦人科へコンサルテーションを行う適応としては、①ステージIV乳がんでない（遠隔臓器転移がない）、②閉経前乳がん、③患者に挙児希望がある、の3点のみとし、乳腺科側では厳密な年齢の制限を設けていない。

C. 研究結果

O!PEACE（がん患者の妊孕性温存に関する

心理教育とカップル充実セラピー) 研究の結果に関しては、研究主幹での研究結果に譲る。

当施設において、2010年から2016年8月までに乳腺科から産婦人科へ妊孕性温存についてコンサルテーションを行った患者は126人であった。平均年齢は34.3歳であり、婚姻状況は、既婚者54%、未婚者46%であった。

産婦人科にコンサルテーションをした後に妊孕性温存治療法のインフォームドコンセントやカウンセリングなどが行われ、最終的に患者が選択する方法のうち最も多いものは、経過観察のみ(治療介入なし)であり、全体の49.2%と約半数を占めた。治療介入なし群には、積極的な妊孕性温存治療は行わないがAMHなどのホルモン値をフォローアップする患者も含まれた。治療介入なしに次いで卵巣組織凍結、胚凍結が多く、卵子凍結が最も少なかった。

年齢別でみると、ほとんどの年齢層で治療介入なしが半数を超えていたが、30-34歳のみ治療介入なしが全体の半数以下であり何らかの妊孕性温存治療を行っていた。

D. 考察

当院症例の解析において妊孕性温存治療介入なしが受診者全体の約半数であったが、治療介入なしを選択した患者でも、乳がん治療中・終了後に再度のがん・生殖医療外来受診希望があればスムーズに受診できるよう、乳腺科・産婦人科間で連携を図っている。

30-34歳で治療介入の割合が増加するのは、25-29歳に比し30-34歳で既婚率が急上昇することより、胚凍結を選択できるようになることと、ホルモン治療のみであっても約5年間の乳がん治療終了後には自然妊娠率が低下する30歳代後半となること

が要因ではないかと思われる。

E. 結論

乳がん告知直後に妊孕性温存についての選択を迫られる患者は、生命と妊孕性の2つの危機に直面しており心理的支援が必須と考えられる。心理士やカウンセラーの適正な配置、育成が急務である。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

1) 土屋恭子、大井涼子、黒田貴子、土屋聖子、永澤慧、吉田谷芙美、志茂彩華、上島知子、小島康幸、志茂新、本吉愛、白英、川本久紀、首藤昭彦、西島千絵、前田一郎、河原太、鈴木直、津川浩一郎

「当院の乳癌患者における妊孕性温存の取り組みについて」第24回日本乳癌学会学術総会 一般セッション 東京ビックサイト 2016年6月18日

2) Yasuyuki Kojima, Kyoko Tsuchiya, Chie Nishijima, Nao Suzuki, Koichiro Tsugawa

“FERTILITY PRESERVATION FOR BREAST CANCER PATIENTS AMONG REPRODUCTIVE AGE – A SINGLE INSTITUTE EXPERIENCE” Global Breast Cancer Conference Jeju Island, Korea April 29, 2016

3) Yasuyuki Kojima, Kyoko Tsuchiya, Chie Nishijima, Nao Suzuki, Koichiro Tsugawa

“Our act on fertility preservation for young breast cancer patients in our single institute” Cancer Survivorship Symposium San Francisco January 16, 2016.

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案

なし

3. その他

なし